

P-197

ICT主催の出前講座の取り組み

高山赤十字病院 ICT

○後藤 泰代、稲垣 孝行、甚田由美子

【目的】出前講座による感染管理に関する職員教育を実施し、有用性について評価・検討する

【方法】当院栄養課・薬剤部・検査部・リハビリテーション課・放射線科・臨床工学課・事務部・老人健康施設職員を対象に、部署毎に手指衛生の出前講座を実施した。期間は平成24年9月～平成25年3月とした。所要時間を30分とし実技を中心とした。出前講座終了後にはアンケート調査を行った。

【結果】参加者は193名であった。講座終了後のアンケートは180名から回答を得た。参加理由で最も多かったのは「職場で役立つから」であった。内容および研修の進め方は「非常に良かった」が最も多かった。どの点が良かったかは、「職場で役立つ」が最も多かった。目的の達成度は「達成できた」参加者が多かった。具体的に「企画そのものが新鮮」「複数のテーマから希望するものをやってもらいたい」との意見や感想を得られた。

【考察】今回は開催時間を部署のカンファレンスの時間や休憩時間を活用したことで、参加者が多かったと考えられた。またテーマを絞り、統一したチェックリスト・シナリオによって内容を伝えることができたと考えられた。少人数制で行ったことで質問や確認がしやすかったと考えられた。

【結語】今回の意見をもとにしたテーマの選定や少人数制の研修会について積極的に企画し、継続して取り組んでいきたい。

P-198

潰瘍性大腸炎に対する血球成分除去療法の有用性について

秋田赤十字病院 臨床工学課

○佐賀 夏来、熊谷 誠、小林 久益、永井 悠、
児玉 健太、大久保範子、沼田 有華

【目的】潰瘍性大腸炎(UC)難治例に対する血球成分除去療法(CAP)に関して診療報酬改定後に行われた新たなCAP療法について若干の知見が得られたので報告する。

【対象および方法】対象は、当院にてCAP療法を施行した患者17症例である。方法は、寛解導入が目的の週1回群とステロイド減量が目的の2週に1回群に分け、ステロイド内服量について治療前後で比較検討を行った。

【結果】週1回群では、プレドニン内服量は治療前後で 25.6 ± 14.2 mg、 16.1 ± 7.3 mgと有意な傾向で差がみられた。2週に1回群では、プレドニン内服量は 18.2 ± 21 mg、 3.6 ± 7.7 mgと有意に低値を示した。

【考察】2週に1回群のステロイド内服量の比較においては、治療前に比べ治療後は有意に減少した。この結果から2週に1回の治療がステロイド減量目的の治療方法として有用であると考えられる。このことから、さらには寛解維持に対する治療法として期待がもてる。

【結語】主としてステロイド減量を目的とした2週に1回のCAP療法において、ステロイド減量が可能だった。

P-199

超音波画像診断装置を用いたシャントカルテの作成と有効性について

飯山赤十字病院 医療技術部臨床工学技術課

○奥山 巧、桐澤 翔、阿部 貴久、相馬 洸輔、
鳴海 大輔、石田 大貴、金井 康文、高澤 広一

【はじめに】当院、透析室スタッフは、医師1名・看護師7名・臨床工学技士8名・看護助手1名です。その内、穿刺に関与するスタッフは15名である。また、15名中5名が透析室勤務3年以下である。

【目的】当院は、透析業務経験年数が浅いスタッフが多く、穿刺を行う際シャントカルテで穿刺部位を確認して行っています。しかし、現在のシャントカルテは血管の走行・穿刺部位を簡易的に示したものである。そのため、穿刺部位が集中してしまい、その部分に瘤の形成、また、周囲の皮膚が薄くなり止血困難等の異常部位を形成している状態です。このような状態を作らないため、超音波画像診断装置を使用し、得たシャントの情報(血流量・血管径・血管内腔・血管走行・深さ)を基に新しいシャントカルテを作成し、現在使用しているシャントカルテと比較して新しく作成したシャントカルテが穿刺時などに、どのように有効であったか検証し報告する。

【方法】穿刺を行うスタッフ(臨床工学技士8名・看護師7名)を対象に、新しく作成したシャントカルテを使用する。旧シャントカルテと比較し、穿刺時にどのような点で有効であったか、不具合な点はどこか、また穿刺時以外でも有効な活用方法があるが、アンケートを作成し実施する。

【結論・考察】超音波画像診断装置を用いて作成した新しいシャントカルテと、簡易的に作成された旧シャントカルテの有効な点・不具合な点を比較検証したアンケートの詳細は、結果・考察と合わせて当日のポスターにて報告します。

P-200

透析療法関連機器更新後に発生した機器トラブルの集計と分析

横浜市立みなと赤十字病院 臨床工学部 臨床工学課¹⁾、
横浜市立みなと赤十字病院 腎臓内科²⁾

○大谷 英彦¹⁾、鎗木 聡¹⁾、岡田 直樹¹⁾、小林 隆寛¹⁾、
谷川 太一¹⁾、宮島 敏¹⁾、初鹿野夏気¹⁾、森下 和樹¹⁾、
皆川 宗輝¹⁾、藤澤 一²⁾

【目的】当院の透析室は、2012年3月に透析療法関連機器を更新した。更新から2013年4月までの期間に発生した新規購入機器のトラブルについて集計および分析したので報告する。

【方法】透析室のベッド数は8床である。対象機器は個人用多用途透析装置DBG-03 (2台)、多用途透析用監視装置DCS-100NX (6台)、多人数用透析液供給装置DAB-10NX (1台)、全自動溶解装置DAD-50NX (1台) (いずれも日機装社製)、人工透析用逆浸透精製水システムSHR-81H (1台) (ダイセン・メンブレン・システムズ社製)。対象期間は臨床使用を開始した2012年3月26日から2013年4月30日までとした。これらの機器のトラブル発生記録から、装置ごとに不具合発生部分、時期、影響・効果、重要度、頻度、対処・対策について時系列に表形式でまとめた。

【結果】トラブル発生総数は29件。対処内訳は、部品交換が11件、経過観察が10件、設定変更が6件、本体代替交換が1件、その他が1件であり、部品交換で対処したトラブルは2013年1月19日以降報告されていない。

【考察】新規購入機器の使用開始から部品交換を要するトラブルが発生しなくなるまでの約10ヶ月間が、故障率のバスタブカーブにおける初期故障期間に相当すると思われる。そして初期故障期間が経過した後は、機器の性能水準を維持し、安全性を確保するために日常点検および定期点検を適切に実施していく。

【結語】新規購入機器におけるトラブル発生記録を集計および分析したことで、初期故障期間を推定することができた。